

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 10 月 16 日現在

機関番号：34401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2017

課題番号：25862186

研究課題名(和文) 肢体不自由児の性教育レディネスの育成 ライフスキルの習得へのアクションリサーチ

研究課題名(英文) Training to improve readiness of sex education for disabled children -Action research to acquired life skills-

研究代表者

曽我 浩美 (Soga, Hiroyoshi)

大阪医科大学・看護学部・助教

研究者番号：40614045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、思春期の肢体不自由のある子どもにおけるライフスキルの習得状況を明らかにすることである。年に2回ずつ継続的に教育的介入を実施した後、子どもの母親6名と、ライフスキル講座に参加したボランティア5名を対象に、半構成的面接法を用いて調査を実施した。分析の結果、子どもは【状況判断力】【対応力】【思考力】【表現力】【選択力】【主体性】【現実認知】【他者への配慮】【他者理解】に関するスキルを獲得したことが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was to reveal what life skills were acquired by adolescent children with physical disability. Educational intervention was held two times each year. Semi-structured interviews were conducted with six mothers of disabled children and five volunteers who participated in study session of life skills. The analysis of the verbatim transcripts revealed that children acquired skills about "Situation judgement", "Correspondence", "Thinking", "Expression", "Choice", "Subjectivity", "Recognition of reality", "Consideration to others" and "Understanding of others".

研究分野：看護学

キーワード：肢体不自由 ライフスキル 教育的介入 思春期

## 1. 研究開始当初の背景

研究者は肢体不自由児を育てる親の自助サークル(以下、自助サークルと示す)の活動に、10年来ボランティアとして関わってきた。活動開始当初は幼児であった子どもも成長し、やがて思春期を迎えると、中には異性への憧れや興味を示す言動を表出する子どももみられるようになった。

障害児の性に関する先行研究では、知的障害や発達障害を対象にしたものが多い。知的障害児は、第二性徴や性情報、性行動の意味を十分理解することができず、時に社会規範から逸脱した行動をとること(井上、2010)(菊池、2010)が危惧されている。また、発達障害児は、状況に応じた行動や相手の立場に立って考えることが苦手であり(川上、2011)、養育者は性教育の具体的方法を見出せず、戸惑っている(菊池、2010)。さらに、学校教育の中でも性教育は体系化されておらず、教員の知識不足やサポート体制の不足が指摘されている(井上、2010)。こうした先行研究がなされている一方で、肢体不自由児の性教育を実際に行い評価した研究はほとんどみられなかった。

性教育の必要性を感じつつも、家庭や学校では対応できずに悩んでいる肢体不自由児の母親から、研究者は相談と同時に性教育の依頼を受けた。健常児への性教育の実践活動を経験していた研究者は、母親と実施方法・内容に関する話し合いを重ね、自助サークル活動の場で第1回性教育講座を開催した。「命の大切さ」「第二性徴による身体的変化」「自己肯定感の育成」「同性ボランティアとの内緒の話(悩みの相談)」の4つの題材で構成したプログラムを実施したところ、異性への興味、恋愛話への関心があること、男女の成長の違いに関する知識を持っていること、親に感謝する言動がみられ、両親からの愛情を自覚していることがわかった。

母親には性教育の実施を望まれていたが、研究者は「性行動」「避妊」等の具体的な性的行動に関する内容の教育に踏み込むことを躊躇った。その理由は、教育の方向性を検討するための母親との話し合いで、子どもが性知識を持ち性への興味を表出したら、子ども自身が適切に処理することができるかという疑問も含め、親はどのように対処するのかを確認すると、母親には対処する覚悟ができていないことがわかったためである。また、ある子どもには、担任教師が他の仕事に追われている時に、相手が何をしているかという状況を理解せずに、自分の訴えだけを一方的に要求するという行動がみられており、「その場の状況を把握し、自分のとるべき言動を判断し、実行に移す力」が不足している状況がみられた。知的障害のみられない子どもにこの力が不足しているという事実は、母親がその対応に苦慮するということにつながっていた。発達障害児ではこの種の能力が不足していることで社会的問題行動につながる

危険性があると述べられており、肢体不自由においても、単に性に関する知識を得るだけでは、社会的な常識を逸脱した生活上の問題の誘発につながると考えられた。

性教育は、性に関する知識を与えるだけでなく、基本的人間関係の一形式として性の意義を理解させ、これに対する態度を正しく導くための教育である。そのため、基本的人間関係を構築できなければ、性道徳を理解することは困難である。そのため、「肢体不自由児が性教育を受けるための心理的準備」として、相手の気持ちを推し測る力、場の雰囲気や察する力をはじめ、日常生活で生じる様々な問題や要求に対して、建設的かつ効果的に対処するために必要な能力(=ライフスキル)を育成することが重要であり、その結果、自身の情動や言動をコントロールし、常識や社会倫理に則した行動をとることができるようになると考えた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、肢体不自由のある子どもにライフスキルの習得を目指した教育的介入によるアクションリサーチを行い、性教育レディネスを育成することである。また、そのプロセスを通してどのようなライフスキルを習得することができたのかを明らかにする。

## 3. 研究の方法

### (1) 子どもへの継続した教育的介入

#### 研究デザイン

ミューチュアルアプローチ(Holter&Schwartz-Barcottによる分類)によるアクションリサーチ

研究協力者(アクションリサーチメンバー)

)自助サークルに所属する肢体不自由児

性別・人数:男児4名・女児2名

年齢:14~19歳(研究開始時)

疾患名:脳性麻痺・脊髄性筋委縮症・脳血管障害

)自助サークルに所属する母親

人数:6名

)ボランティア(大学生・大学卒業生)

性別・人数:各回男性5名・女性10名程度

職業:主に看護系大学所属の大学生または卒業生(看護師・保健師資格を所有)

#### アクションリサーチの進め方

『教育的介入(ライフスキル講座、ボーイズ&ガールズトーク)』『リフレクション』を年2回(3月・7月)ずつ繰り返して実施した。

)教育的介入(ライフスキル講座・ボーイズ&ガールズトーク)

肢体不自由という障害の特性から、子どもには介助のために常に大人が付き添っており、子ども同士のみで関わる機会がなく、友達から対人関係スキルや常識的な価値観を学ぶことができない環境で過ごしてきた。そ

の影響により、「相手の気持ちを考えたり、その場の状況を察する力」、「自分のとるべき言動を社会常識に照らし合わせて考え、判断する力」、「認知・理解したことを社会常識に沿った言動として表出することができる力」などの能力が未熟であると考えた。そこで、自助サークルが主催する1泊2日の合宿において、ライフスキルを身につけるための勉強会『ライフスキル講座』を行い、また就寝前には『ボーイズ&ガールズトーク』と称して同性同士気軽に秘密の会話や相談ができる場を設けた。その際、研究協力者の許可を得て、ICレコーダーで会話内容を録音、あるいはビデオカメラで活動の様子を記録し、振り返りに活用した。

#### リフレクション

教育的介入（ライフスキル講座、ボーイズ&ガールズトーク）実施後に、母親と研究者とで振り返り、子どもの現状と課題等について話し合い、次回への方向性を検討した。

## (2) 教育的介入によるライフスキル習得に関する評価

### 研究デザイン

#### 質的記述的研究

#### 対象者

自助サークルに所属する母親6名程度

自助サークル活動における教育的介入のうち、2011年以降の活動に半数以上ボランティアとして参加し、直接子どもに関わる体験を有している者5名程度

#### リクルート方法

説明文書を用いて自助サークルの代表者の承諾を得た上で、集団活動の場で対象者全体に対して書面と口頭で研究の主旨を説明した。後日、協力する意思がある場合にのみ、対象者から研究者へ連絡をいただくようにした。

#### データ収集方法

インタビューガイドに基づき、半構造的面接法を用いてデータ収集を行った。面接は原則、グループインタビューにて実施し、面接時間は1回あたり60分～90分程度とした。内容は対象者の同意を得られた場合のみICレコーダーに録音することとし、録音の同意が得られない場合には、承諾を得てメモをとることとした。

#### 面接内容

主に以下の項目について質問を行った。

#### <母親>

思春期に直面した子どもの困り事と解決に向けての対処および子どもの反応・変化

教育的介入からの学びを日常生活に活かした/学びが日常生活に活かした場面

子どもの成長・発達を感じた場面（時間経過による子どもの変化）

教育的介入・日常生活が子どもに与える影響

#### <ボランティア>

子どもとともに行った活動内容と子ども

#### の言動・反応

子どもの成長・発達を感じた場面（時間経過による子どもの変化）

教育的介入・日常生活が子どもに与える影響

#### 分析・評価方法

録音した面接内容を生データとし、逐語録を作成した。「ライフスキルの習得状況」について意味のある文節ごとにコーディングを行った。コードを意味内容の類似性に基づいて分類し、カテゴリを抽出した。抽出したカテゴリから、思春期の肢体不自由児が教育的介入に継続して参加する中でどのようなライフスキルを習得したかについて明らかにした。

## (3) 研究計画調書からの修正・変更内容

研究計画の段階では、アクションリサーチのプロセスの中でライフスキルの習得状況について評価する予定であった。しかし、習得を目指す能力は、1回の介入前後で大きく変容が生じるものではなく、教育的介入直後のリフレクションでは介入の是非を振り返ることは可能であっても、介入が子どもにどのような影響を与えたのかを把握することは困難であった。そのため、上記2)として、数年間、教育的介入に直接携わってきた者に対して、教育的介入への継続的参加により子どもにどのような変化がみられ、どのようなライフスキルが身についたと考えられるのか、経験を踏まえて語ってもらい、評価の根拠データとするため、面接を実施することとした。

## 4. 研究成果

### (1) 教育的介入（ライフスキル講座）

#### <第1回>

#### 将来の夢・目標

子どもが将来の夢・目標を挙げ、その実現に向けて具体的な計画をボランティアとともに考えた。また、ボランティアの夢・目標とその計画を発表し、共有・意見交換を行った。子どもはボランティアの現実的な目標に興味深く聞き、視野を広げることができていた。

#### お願い仕分け

子どもとボランティアが混合でグループをつくり、子どもの1日の日常生活行動を振り返り、具体的動作を挙げ、「自立」「介助を受けているが自立で可能」「介助のもと実施（依頼なしでもしてもらえる）」「介助のもと実施（依頼して実施）」「したことがない」の5段階で分類した。その中から子どもができるようになりたいことを挙げ、実現させるための具体的な計画をグループで話し合い、現実的に考えることができていた。

#### <第2回>

#### ロールプレイ（寸劇）

ボランティア数名と子ども1名でグループを作り、「初デート」をテーマに5分程度の

シナリオを作成し、グループ全員が何らかの役割を担当し、協力してひとつの劇を創り上げ、発表した。子どもは一から劇を考える体験は初めてであり、ボランティアのサポートを受けながら演じることができた。

会話術を身につけよう

活動に初参加で子どもにとって初対面のボランティアと1対1で「事業所の昼休憩で話す」シチュエーションを設定し、自由に会話してもらった。数分間実施後、振り返り、それを踏まえて再度実践を行った。子どもは初対面の緊張感の中、どう会話を切り出し、広げるかという方法を考え、助言をもらいながら実践する体験ができていた。

<第3回>

ロールプレイ(寸劇)

子どもとボランティアを混合で2グループに分け、「親友は恋のライバル」「僕の恋愛必勝法」の2つのテーマ・あらすじのもと、5~10分のシナリオを作成した。第2回からの発展として、子どもが主演を演じることとしたため、グループの中心的な役割を担い、ひとつのものを創り上げる体験ができていた。

<第4回>

ロールプレイ(寸劇)

子ども2名または3名とボランティア数名からなるグループに分かれ、これまでの経験をもとに、自由に10分程度のシナリオを作成し、主演を子どもが演じた。グループによって内容や展開が異なり、ドラマや漫画のような非現実的な仮想世界の役柄になりきって楽しく演じており、日常ではできない体験をすることができた。

<第5回>

ディベートディスカッション

子どもとボランティアを器械的に2つに分け、「住むなら都会か田舎か」「働く上で大切なものは報酬かやりがい」のテーマで討論を行った。グループを器械的に2派に分けたことで、自分の意見に反する者もいたが、いかに自分側の意見の正当性を根拠づけて主張できるかを考えたり、相手の意見をよく聞き、自分の意見と対比させるといった経験ができた。

ロールプレイ(寸劇)

「働く上で大切なものは報酬かやりがい」をテーマにシナリオを作成し、子どもが主演で演じた。この討論で主張し合った意見からは、障害者の就労や報酬の現実と理想が垣間見られ、それを参考に作成されたシナリオには日々の就労・賃金等に対する子どもの希望が表現されているものもみられた。

<第6回>

ディベートディスカッション

「1人暮らしと3世帯暮らしはどちらがよいか」等のテーマに対し、子どもとボランティアが混合で2派に分かれて討論を行った。第5回と異なり、グループを個々の意見に従って2派に分けたことで、自分の抱く思いを言語化し、相手を納得させられるよう論理的

に伝える方法を考える経験ができた。

デート体験(ショッピングモール散策)

子どもがボランティアの中からデート相手を1人選び、2人が中心になり、他のボランティア数名とともにAショッピングモールの散策を行った。デート相手に選ばれたボランティアは子どもの行きたい場所・したいことの意味を尊重しながら一緒に楽しく散策し、ショッピングや食事を楽しむことができた。また、他のボランティアは行動をともにしながら、車椅子での移動における困難や危険を予測し、子どもや周囲の安全確保に努めた。子どもは親とはショッピングに行く経験はあっても、友達や同世代の仲間と遊び感覚で出かけることがほとんどなく、貴重で印象深い経験ができていた。

<第7回>

ロールプレイ(寸劇)

「親友への悩み相談」をテーマに、子どもとボランティアが2人ペアとなり、シナリオを考えて演じた。少人数であることにより、シナリオを作る上で子どもの考えや発想が重要であったが、どの子どももその子なりの意見を伝えることができており、それぞれが個性的な寸劇を創り上げることができていた。

<第8回>

旅行プランを考えよう

子どもとボランティアが混合で2グループに分かれ、親の同伴なしに子ども主体で「B動物園」「Cアミューズメントパーク」へ行く日帰り旅行プランを考え、模造紙に書いて発表した。話し合いでは、子どもが中心となり、電子媒体を活用してホームページから交通手段、旅行先等の情報を収集し、1日のスケジュール、予算、介助を要する場面と対処方法等について具体的に考えることができた。現実的に実施可能かどうかという点では、不足する視点もみられたが、ボランティアからの問いかけで気づいて考える等、視野を広げることができた。

<第9回>

旅行プランを考えよう

子どもとボランティアが混合で2グループに分かれ、移動に半日程度を要する遠距離の旅行プランとして、交通手段と宿泊施設について考えた。交通手段では電車・レンタカー等の複数の案が挙がり、その利点と欠点について検討することができた。また、レンタカーでは、運転することになるボランティアの負担への配慮等も考えることができていた。宿泊施設は肢体不自由であることや車椅子であることによる宿泊可能施設の条件を挙げた上で、空き状況を確認することができていた。

2018年夏には実際に立案したプランのもと旅行を行い、その評価と課題の確認を行う予定である。

(2) 教育的介入によるライフスキル習得に

関する評価（結果）

対象者 11 名（母親 6 名、ボランティア 5 名）への面接調査の結果、ライフスキル習得状況については、74 の小カテゴリ、30 の中カテゴリ、9 の大カテゴリに分類された。（以下、小カテゴリは「」、中カテゴリは「 **< >**」、大カテゴリは【】で示す。）

大カテゴリとして、【状況判断力】【対応力】【思考力】【表現力】【選択力】【主体性】【現実認知】【他者への配慮】【他者理解】が抽出された。以下、大カテゴリ毎に内容を説明する。

#### 【状況判断力】

子どもには「場に適した発言か否かを状況判断」する等、＜状況判断力の向上＞がみられていた。

#### 【対応力】

子どもには「母親以外の人前では場をわかまえて行動」したり、「場の空気を読んで発言」する等、＜状況に適した対応力の向上＞がみられた。また、「初参加で戸惑うボランティアを気遣い自ら声かけ」をしたり、「初対面の相手でもわかるように食事介助・体位固定方法を説明」する等、＜初対面での対応力の向上＞がみられた。

#### 【思考力】

子どもは「同世代の感覚・評価に触れ自己の意思の存在を認識」する等の経験を通して、徐々に「自身の考え・意見をもつ」ことができるようになったり、「多角的、総合的視点から思考」することができるようになってきており、＜思考力の向上＞がみられるようになってきた。

#### 【表現力】

子どもには「食事介助方法を具体的に言葉で説明」したり、「介助への感謝の思いを言語化」する等、＜言語的表現力の向上＞がみられるとともに、「表情の豊かさ」が表れたり「子どもからの親近感をボランティアは実感」する等、＜非言語的表現力の向上＞がみられていた。さらに、＜健常の同世代と対等に討論できる力の習得＞や、＜障害児同士で討論できる力の習得＞等、他者とのコミュニケーションにおける表現力の成長がみられていた。

#### 【選択力】

子どもは、教育的介入を通して「相談相手・依頼相手を自己にて選択」し、ボランティアに悩みを相談したり、「着たい洋服は自身で選択」するようになる等、次第に＜選択力の向上＞がみられるようになってきた。

#### 【主体性】

身体的介助を要することや、疾患による構音障害、認知発達の未熟さ等の影響もあり、これまで子どもは自ら発言したり行動することは少なかった。しかし、教育的介入を通して、「自ら会話を切り出し、主体的に展開」できるようになったり、ボランティアとの「関係性構築により、主体的で対等な会話が可能」となる等、＜主体性の向上＞がみられ

るようになった。

#### 【現実認知】

子どもはボランティアとの関わりや教育的介入による学習を通して、「夢や憧れと現実との違いを認識」したり「努力では解決できない現実を受容」する等、＜現実を認識＞し、＜思い通りにならない現実を受容＞していた。また、「外見への他者の目線を意識」する等、＜客観的視点からの自己認識＞ができるようになり、「同世代の健常者で流行のファッションを意識」する等、＜健常の同世代と同等の感覚を獲得＞しはじめていた。

#### 【他者への配慮】

子どもは「吃音のある仲間とのコミュニケーションに気遣い」をみせたり、本活動における「運転によるボランティアへの負担や事故の危険性を思索」する等、＜他者への配慮＞のある言動を示すようになった。

#### 【他者理解】

子どもには「ボランティア個人の話への興味を表出」したり、「ボランティアと親密になり、学ぶために意欲的に行動」する等、＜健常な他者理解への興味・関心の向上＞がみられるようになった。

### (3) 考察

本研究における教育的介入は、子どもが性教育を受けても、得た知識による情動・言動を制御し、社会常識に即した行動をとることができるようになるための基盤として、「相手の気持ちを考えたり、その場の状況を察する力」「自分のとるべき言動を社会常識に照らし合わせて考え、判断する力」「認知・理解したことを社会常識に沿った言動として表出することができる力」といったライフスキルの育成を行うことであった。当初は場の雰囲気や察することができず、不適切な言動がみられる子どももいたが、教育的介入を受ける中で、【状況判断力】【対応力】【思考力】【表現力】【選択力】【主体性】【現実認知】【他者への配慮】【他者理解】といった力を習得あるいは向上させることができた。このような結果が得られた主な要因としては、ひとつめとして『教育的介入プログラムの効果』があると考えられる。ライフスキル講座のプログラムは、子どもがその時直面している問題状況や課題となっていることを研究者と母親とで毎回介入前に話し合い、その問題や課題を解決する上で必要な知識の獲得あるいはスキルの育成のために考えた内容を実践した。各回のプログラムには、本研究を通して習得できたライフスキルのいずれかには影響を与える内容が含まれており、介入によってライフスキルの育成に何らかの効果が得られたものとする。中でも、子どもは活動する上で多くの介助を要するため、これまでの生活では何をすることも受け身となることが多かった。そこで、ライフスキル講座では子どもが中心となって考えたり、子ども主体で体験し、自分事として実感できる内容としたこ

とで、【主体性】【思考力】等の育成に効果的であったと考える。

ふたつめの要因としては、『ボランティアの存在と関わりの効果』があると考え。子どもはこれまでの生活において同世代の健常者との密な関わりを持つ経験が極めて少なく、他者とのコミュニケーションといえば学校教諭や介護者等の大人ばかりであった。その点で、本研究において直接的な関わりを担ったボランティアが、これまでに子どもが関わったことが少ない同世代の健常者であったことに意義があると考え。大人から一般的な社会常識は伝えることができても、子どもの世代の常識的感覚は同世代間の交友関係の中でしか学ぶことができない。ボランティアは、子どもとの継続的な関わりを通して密な人間関係を構築し、安心感と信頼感の中で、新たな刺激を与えてくれる友達のような存在であり、子どもは様々なボランティアとの会話から、自身では体験したことのない未知の世界を聞き知り、感情を揺さぶられる中で自分を省みることができており、ボランティアの存在は子どものライフスキルの育成や価値観の形成に大きな影響を与えたのではないかと考える。

#### (4) 今後の課題と展望

肢体不自由のある思春期の子どもに対して、同世代のボランティアが直接関わり、継続的に教育的介入を行うことは、子どものライフスキルを育成し、常識的感覚を身につけるためのきっかけとなり得るものであったと考える。しかし、ライフスキルの成長をもたらす効果としては、年2回の開催だけではスキルを身につけるまでには至らなかったと考える。また、子どもの日常生活での経験や年齢による発達的变化、進学や就職等の外的環境の変化等の影響もライフスキルの育成に関連する要因として考えられるため、真に教育的介入の効果を検証することは困難であった。

本研究では、子どもの変化を客観的視点から捉えるために母親とボランティアを面接の対象として設定したが、子ども本人を対象とし、その主観的な思いや経験を聴取することも教育的介入の効果を検証する上での一案であると考え。

今後は、本研究で実施した教育的介入の評価から具体的計画を立案・実践し、肢体不自由児のライフスキルを育成する上で、より効果的な教育的介入プログラムの開発を目指したい。

#### <引用文献>

井上京子、菊池圭子、遠藤恵子、特別支援学校の児童生徒の性に関する調査-教員を対象として-、山形保健医療研究、13巻、2010、83-94

菊池圭子、井上京子、遠藤恵子、特別支援学校の児童生徒の性に関する調査-保

護者を対象として-、山形保健医療研究、13巻、2010、71-81

川上ちひろ、辻井正次、思春期広汎性発達障害男児への性教育プログラムの検討-試行的実践からの分析-、小児保健研究、70巻3号、2011、402-411

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計0件)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

なし

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

曾我 浩美 (SOGA, Hiroyoshi)

大阪医科大学・看護学部・助教

研究者番号：40614045